とある普通の能力少年。

☆空丸☆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある普通の能力少年。

【Ｎコード】
Ｎ３１７６ＢＡ

【作者名】
☆空丸☆

【あらすじ】
【考察】上条当麻が幻想殺しではなく普通の能力を持っていたら。
インデックスは絶対防御の服を壊されることなく、
御坂美琴の電撃は上条に通じ、
上条さんは無能力者と笑われることもない。

そんな世界（上条さんは若干チート）の物語、ご覧あれ。

プロローグ～猛暑～（前書き）

禁書の二次小説です。

以下無理な人は見ないほうがよかれ。

・書き殴り無理な方
・禁書愛しまくって原作以外は許せん方

以下好きな方は見て。

・主人公がチート
・神裂さん好き
・矛盾あっても面白ければおｋ

プロローグ～猛暑～

とある魔術の禁書目録
×
☆空丸☆妄想

「とある普通の能力少年」
～ＬＯＳＴ　ＴＨＥ　ＩＭＡＧＩＮＥ－ＢＲＥＡＫＥＲ～

～プロローグ～

季節は夏。

能力開発を目的として科学の粋を集めた『学園都市』にも、逃れようのない熱気が訪れていた。

「はぁ・・・、熱い・・・」

第七学区の学生寮ももちろん例外ではない。安い賃貸マンションであるため、資材に断熱効果を施している可能性は極めて低く、エアコンを使用しない限り部屋は蒸し風呂状態になる。

「・・・み、水・・・」

まるでウニみたいな頭髪だな。と、クラスメイトから馬鹿にされるツンツン頭もうなだれ、上条当麻は気だるい表情で冷蔵庫を開けた。

そこには先週買いこんだ食材があるだけで、ドリンクと呼ぶにふさわしい水分は存在しない。

「ふ、不幸だ・・・」

コップを取り出し、水道水を入れるも熱湯が出続けるだけで目的を果たせない。

「くっ、仕方ない。布団でも干してジュース買いに行くか」

毎日布団を干しなさい。それが、彼の母親の唯一の言いつけであり、彼の守る唯一の決めごとだ。

敷布団とタオルケットを抱えると、右足でガラス戸をあける。少年に防犯の意識はなく、ガラス戸に鍵はかけていない。

「ふーーー、エアコンつけてないと外のほうが涼しいかも・・・な」

ベランダに出ると、そこには白い布がかけてあった。

純白の布は日差しを浴びて輝いており、それが高級な品であると布の知識が皆無である彼でもすぐに理解できた。

「え、えーっと、・・・上の階から落ちてきたの・・・か・・・なっ！？」

拾い上げようと手を伸ばした瞬間、それは生物のようにもぞもぞと動いた。

――否、生き物だった。中身の話だが。

その“生き物”の先端が折れ曲がり、エメラルドに光る虚ろな瞳がこちらを曖昧に捉えた。
折れ曲がった反動で銀髪が水のように流れ、ベランダの床まで届く。
透き通るような白い肌をしており、それが人間――とても美しい少女だと認識するのに、上条は多くの時間を必要としなかった。

「・・・あのー、どちら様でしょう？」

日本語は通じるのか、滑り落ちないのか、なぜここにいるのか、さまざまな疑問と質問が生じる中で、上条は日本人として恥じない規範的行動“身分の確認”を試みた。

――しかし、少年の思考はあっさりと瓦解する。

「・・・ご飯を食べさせてくれるとうれしいな♪」

「日本語で・・・、しかも話を聞いてくれていない」

がっくりとうなだれつつも、上条は少女を抱き上げた。

想いと願いが交差する時、『物語』は始まる――――。

第一章『歩く協会』

第一章『歩く教会』

「ふもっふもっ」

「・・・・・・」

「ふもっふもっふもっ」

脱水症状を起こしかけていたことをすっかり忘れ、ウニ頭の少年“上条当麻”は銀髪少女を机越しに見つめていた。

少女はとても幼く見えたが、外人と接することが初めての上条には少女の年齢を推定することができない。自分より年下なのだろうと決めつけ話を切り出す。もちろん初対面の相手には敬語だ。

「・・・で、あなたはどうしてベランダなんかに引っかかっていたのでしょうか？」

「ふもふもふもふもっ」

よほど腹が減っていたのだろう。頬いっぱいに野菜炒めを詰め込んだまま少女は何かを喋っている。

「まぁ・・・後でもいいか」

結局、何度もおかわりを催促され、料理を作り足すこと１０品目。買いこんでいた一週間分の食料を全て消費した時には、少女は満面の笑みで感謝の言葉を述べた。

「見ず知らずの私なんかのために料理を作ってくれて本当にありがとうなんだよっ。この国は他人に冷たいと多くの記録が述べてるけど、そんなことはなかったんだよ」

えへっ。と破壊力抜群な笑顔を見せられ、いや魅せられた上条は再び先ほどの話を切り出す。

「え、えーっと、君が誰なのか、そしてなぜうちのベランダに引っかかっていたのか、できれば馬鹿な上条さんにご教授願いたいんですけど」

少女は表情を曇らせ、そして少し辛そうに答えた。

「それはね、・・・逃げてたんだよ」

逃げていた。とても現実味のない言葉。

「鬼ごっこかなんかしてたのか？」

遊びのイメージから急に年下感が強まり、上条はため口になる。しかし、少女は首を横に振ると、

「ううん、違うんだよ。本当の意味で追われてたんだよ」

本当の意味で。少女は続ける。

「私が何に追われて、何から逃げて来たのか。それは聞かないほうがいいんだよ。それより、ご飯のお礼がしたいんだよ。なんでも言ってほしいかも」

後半のまくし立てるような言葉は、前半の深追いを拒絶していた。上条もそれを理解して、質問を変える。

「あ、ああ、お礼なんて良いんだよ。それより、名前を教えてくれないか？」

お安いご用なんだよ。少女に笑顔が戻る。

「私の名前はインデックス。イギリス清教所属のシスターなんだよっ♪」

上条当麻は後悔した。外国少女の笑顔の素晴らしさを知らなかったことに、日本人に生まれたことに、そして何より先ほど見せた少女の闇を取り除こうともせず諦めたことに。

「インデックス？　って本の目次？」

にわかには信じられない名前だったが、外人の名前の知識などなく、それが冗談なのか本気なのか上条には判断できない。

「禁書目録って言って・・・って、そんなことはどうでも良いよね」

言葉を濁す。上条はもどかしさを押し殺し、違う質問をした。

「インデックスはシスターとはいえ暑くないのか？」

素材は分からないが、手が隠れるほど長い袖に、地面をするほどの長さをもった修道服。見ている側が暑くなるような服装だ。

「ふふーん、これはね“歩く教会”って言って魔術によって結界が施されてるから暑くも寒くもないんだよっ♪」

胸を張るインデックスに上条は苦笑いで答えた。

「あー、駄目だそういうの。ベランダにいたから尋常な理由じゃないことは分かるけど、魔術とか歩く教会とか、科学の世界で生きてる俺にはとてもついていけません」

両手を挙げ降参のポーズをとる。

「むむむっ、とーまは理解できてない“あるのだからあるのだろう”科学は信じて、見たことないからって“あるかもしれないある”魔術は信じないんだねっ」

さりげなく馬鹿にされていることに上条は気付かない。もちろんインデックス本人も自覚していない。

「んー、だって科学の恩恵は受けてるけど、魔術の存在を実際に見たことないし・・・まぁ、俺の能力も幻想を現実化するって意味では魔術みたいだけどな」

「・・・何それ？　魔術名も儀式もなしにそんなことができるの？」

きょとん、と目を丸くして質問するインデックス。

「ああ、科学の力だからな。脳が演算してるからそれが儀式に近いのかもしれないけど」

「へぇ、にわかには信じられない話なんだよ」

お互いに相容れない幻想を抱えていることを理解し、幻想自体を共有することはあっさりと諦める。

「さて、と。そろそろ行かなきゃ・・・なんだよ」

インデックスは改めてお礼を述べると、そそくさと玄関へ向かう。

「お、おいインデックス。本当に一人で行っちゃうのか？　追われてるんだろ？　・・・何だっ――――」

上条の言葉を遮り、泣きそうな表情でインデックスは答える。

「とーまは・・・地獄の底まで一緒に飛び込んでくれる・・・かな？」

少女の絶望の端に触れた気がして、少年は歩みを止める。そして、それが答えだとばかりに少女は笑顔で、

「それじゃあ・・・なんだよ」

少女は駆け足で去った。

「・・・なんだよ、それ」

少年には汚れた食器と、少女の甘い香りだけが残った。

第一章『歩く協会』（後書き）

☆こたつの上にインデックス☆

禁「とーまとーま、ねえとーま？」

上「ん？　なんだインデペンデックスデイ」

禁「ムッ、とうまもこの世から独立させてほしいのかな？」

上「い、いえいえ、それでなんでしょう？」

禁「とうまって原作じゃ幻想殺しって能力もってるんだよね？」

上「ああ、そうだぞ。どんな異能の力でもぶち殺す優れ物だっ」

禁「その能力で私の服をひんむくんだよね？」

上「・・・・・・」

禁「その上でまだ幼くて可愛い私の裸体を鑑賞して興奮するんだよね？」

上「・・・・・・」

禁「とうまは本当は知っててて私の服を破いて襲いかかろうとしてたんだよね？」

上「幻想体現！　インデックスの記憶を消去！！」

禁「・・・・・・えっと何の話だっけ？」

上（・・・ふぅ、歩く協会越しでも効いて良かった）

禁「思いだしたんだよ！　とうまが原作で短髪とデートしてた話なんだよ！！！」

上「ふ、不幸だぁあああ！！！」

あとがき、完？

空丸「・・・あとがきでもなんでもなくね？」

空蝉「そうですね。でも、これからもやってくんですよね？」

空丸「ああうん。こんな湧いて出たような小説を見てくれてる人もいたしな」

空蝉「三人だけですけどね」

空丸「十分ですm（。・ε・。）m」

これからもよろしくお願いします♪

第二章『電撃×幻想』その１（前書き）

読みやすさ追求のために、章ごとに分けさせていただきます♪

ご意見ご感想あればどんどん来てください（´▽｀＊）

第二章『電撃×幻想』その１

ベランダから始まった異国の少女との交流が記憶に変わる昼過ぎ、ウニ頭の少年は学生服に身を包みとぼとぼと公園を歩いていた。

「・・・はぁ、不幸だ」

スマートフォンの画面を見ると、そこには担任からのメールが出ている。

『上条ちゃんは馬鹿だから補習でーす♪』

「生徒にメールする担任なんてあんたくらいだよ」

それは多くの人間の憧れでもあるのだが、当人が気づくことはない。

しかしながら、本来レベル４である上条当麻が、いくら筆記テストの結果が悪くても補習になることはない。

彼の通う学校にはレベル３以上は数人しかおらず、本来特待生として扱われてもおかしくないのだ。

レベル４【幻想体現】イマジンブレイク

幻想を幻想という枠組みから外し、現実に持ち出す能力。

身体に関わる現象のみに限られるので学園都市に7人しかいないレベル5にはなれていないものの、小萌曰く『上条ちゃんはパーソナルリアリティさえしっかり持てば、どのレベル5よりも強くなれるのですよー』

「上条さんは別にレベル5なんかには興味ありませんよーっと」

能力開発のために存在する学園都市において、能力の優劣は必然。その中で一番強く、便利で、貴重な能力者になりたいと願うのはごく当たり前のことだ。

しかし、上条にはいくばくの興味もない。

そのせいで今学期の能力テストは特に成長が見られなかった。そして結果を見た担任が成績の低い特別補習に上条も組み込んだのだ。

「・・・・・・ん？」

第七学区の公園は無駄に広い。

多くの生徒が利用しているのだが、上条の視界におおよそ公園でやることではない光景が飛び込んできた。

「なぁ姉ちゃん。ちょっと面かせよ」

少女一人、男数名。

「・・・嫌よ」

少女を囲む男たちは大学生くらいで、その風貌からおそらくスキルアウト（無能力者）か能力を持った不良だと上条は判断した。

「常盤台のお嬢様がこんな所に一人でいるなんて、よっぽど暇なんだろ？」

下心なのかカツアゲ目的なのか分からないが、少女が絡まれているという状況だけは上条にも理解できた。

その時には一歩、踏み出していた。

「なぁ、もし来てく「いやぁ、ちょっとごめんなさいね」

男たちの会話を遮り、少年は少女の前に立つ。

「なんだてめぇ！？」

男の一人が睨めつける。

「いやぁ、こいつの連れなんですよ。さっ、行こうぜ」

上条は少女の腕を掴み、この場から離れようとする。

「何すんのよ」

少女は勇ましくも上条の腕を振り払い見事な仁王立ちを見せた。

その時、いたずらな風が公園を吹き抜ける。

少女のスカートの中はベージュの短パンだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3176ba/

とある普通の能力少年。

2012年1月9日01時55分発行